

令和 6 年 5 月 10 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01059

研究課題名（和文）社会変容に伴う新たな人格観に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study on the Expression of New Views of Personhood in the Context of Social Transformation

研究代表者

福井 栄二郎（FUKUI, EIJIRO）

島根大学・学術研究院人文社会科学系・准教授

研究者番号：10533284

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、伝統的な社会における社会変容を視野に入れた新たな人格論を構築することを

目的としていた。具体的にはヴァヌアツ共和国にて調査を行い、人々のキリスト教的な「死」をめぐる理念や実践を詳細に把握した。そこから、西洋的な歴史観、身体観に支えられた人格が新たに形成されたことを明らかにし、伝統的人格観と併存している様相を克明に描き出した。

成果として2023年度に『共存する人格：歴史と現在を生きるメラネシア社会』（春風社）を出版した。これにより「人格の併存」という観点から、メラネシア独自の近代化論を展開することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の独自性は、一つの社会のなかに複数の人格形成の規範があると捉える点である。本研究ではそれぞれが近代化やグローバル化に対する、メラネシア社会独自のリアクションと描き出すことができた。

また人格を論じる本研究は、今後、社会的要請の高い隣接分野との協働が可能である。具体的には、ケアを扱う社会福祉学や医学・看護学の分野と、生殖医療や脳死問題を扱う生命倫理学の分野との連携である。どちらの領域も、本研究のキーワードである「誰」という人称性の問題が問われている。本研究の成果はこうした現代社会の新たな問題とも接続し、展開することができる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to construct a new theory of personhood from the perspective of social transformation in Melanesian society. Specifically, I conducted fieldwork in the Republic of Vanuatu to gain a detailed understanding of people's Christian ideals and practices surrounding death. From this, I clarified that a new personhood had been formed, supported by a Western view of history and the body, and clearly depicted how it coexisted with the traditional view of the personhood.

As a result, he published a book entitled "Coexisting Personhood: Melanesian Society in History and the Present" (Shunpusha Publishing Co., Ltd.) in 2023. In this book, I was able to develop a original theory of modernization in Melanesia from the perspective of "coexistence of personhoods".

研究分野：文化人類学

キーワード：人格 死 メラネシア ヴァヌアツ 歴史 社会変容

1. 研究開始当初の背景

文化人類学における人格論はモースを嚆矢として、フォーテス、レーナルト、デュモン、ブロックに至る長い伝統と多くの蓄積がある。また現在では、人間以外の動植物、自然物、超自然物を含めた多様な観点から文化を論じる「存在論的転回」の議論が盛んに行なわれているが、そのなかでも人格論は中心的なトピックになっている。

実際、近年ではストラザーンの *dividual* / *individual* 論を出発点とすることが多い。また、その批判として、2000 年代以降は、西洋社会の *dividual* 的人格を報告する論考も出てきた。しかしそれは *dividual* の普遍論でもあり、モース以来の「人格は社会的なもの」という点を代価として捨象することにもなりかねない。むしろ西洋社会における *dividual* 論が提起しているのは、人格の別の位相なのではないか。それは、より個人的で、流動的な「かけがえのない人格」あるいは「代替不可能性」とでもいうべきものである。哲学ではレヴィナスの「顔」の議論をはじめ、「人称性」や「単独性」という用語で論じられてきたが、人類学では等閑に付されてきた領域であった。本研究はここに焦点を当てる。

2. 研究の目的

本研究は、伝統的な社会における社会変容を視野に入れた新たな人格論を構築することを目的とする。具体的にはヴァヌアツ共和国にて調査を行い、人々のキリスト教的な「死」をめぐる理念や実践を詳細に把握する。そこから、西洋的な歴史観、身体観に支えられた人格が新たに形成されたことを明らかにし、伝統的人格観と併存している様相を克明に描き出す。そして最終的には「人格の併存」という観点から、メラネシア独自の近代化論を展開する。

具体的には、次の三点に要約することができる。

人々の死をめぐる実践や理念を把握する（下記参照）

それらと、西洋的な人格観・身体観・歴史観との間に関連性があることを解明する

そしてこの新たな人格観と伝統的人格観の併存をメラネシア社会の特質と捉え、西洋近代の影響やグローバル化との関連で考察する

3. 研究の方法

上述の目的遂行のため、当初、本研究は現地調査と文献調査を並行して行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響が残っていたため、現地調査は行わず、文献研究のみで遂行した。

1 年目...ストラザーンの *dividual* / *individual* 論の批判的検討を出発点として、直近の人格論の詳細なレビューを行った。そこで導かれる、人称性、特殊性、かけがえのなさ、顔というキーワードについて考察を行った。とくにニューギニア高地を舞台とした、T. Maschio の『To Remember the Faces of the Dead』が本研究にとって有益であることがわかった。本書は、ストラザーンにほとんど言及せず、ほぼ同様の結論に至っている。それは *person* であると同時に *individual* であるという、現在の人格論のひとつの源流であるともいえる。

2 年目...19 世紀の宣教師たちが残した資料を用いて、キリスト教化前の人々の人格を明らかにすると同時に、改宗による影響の大きさについて考察した。その際、アネイチム島だけでなく、オセアニア地域全体の宣教師の資料も渉猟し、参考にした。その際、ニューカレドニア社会の人格観を論じた M. レーナルトの『ド・カモ』は必読の文献である。ここで示されている、個人名によって与えられる「空白の人格」観は、本研究の舞台であるアネイチム社会と同様である。レーナルト自身、宣教師であり人類学者でもある。その特異なポジションゆえ、ニューカレドニア社会の人格観を分析できたのではないかと考えた。

3 年目...これまでの現地調査での知見も用いて、伝統的な人格観と新しい人格観が、いかに併存しているのかを明らかにした。それを踏まえデュルケムやレーナルトの近代化論を批判しつつ、オセアニア社会の特質を解明し、人格論の新たな視座を提起した。

4. 研究成果

研究期間の 3 年間のなかで得られた知見は、その都度、学会・研究会・論文等で公開してきた。また他の研究者とも協働して意見交換し、さらなるブラッシュアップを図った。

そのなかでも特出すべきなのが、2024 年 3 月に刊行した『共在する人格：歴史と現在を生きるメラネシア社会』（春風社）であり、本研究の集大成といえる。本書（本研究）の独自性は、一つの社会のなかに複数の人格形成の規範があると捉える点である。モース以来、人格概念は社会規範が生み出すものだとして捉えられていたが、それはあくまでも「一つの社会に一つの人格観」であった。またデュルケム的な理解だと、前近代的な環礁社会と近代的な組織社会の間には、明確な断絶が想定されていた。あるいはその反動として、2000 年代のオセアニア人類学では「伝

統と近代が一つに融合する」と主張する論も頻出した。

だが、本書（本研究）ではそれを併存と捉え、それこそが近代化やグローバル化に対する、メラネシア社会独自のリアクションと想定している。人格をめぐる人々の具体的な実践からメラネシア社会の特質を導き出す本書（本研究）は、既存の近代化論にも再考を迫るだろう。

また人格を論じる本研究は、今後、社会的要請の高い隣接分野との協働が可能である。具体的には、ケアを扱う社会福祉学や医学・看護学の分野と、生殖医療や脳死問題を扱う生命倫理学の分野との連携である。どちらの領域も、本研究のキーワードである「誰」という人称性の問題が問われている。「誰」が「誰」にケアをするのか、受精卵や脳死患者は「誰」なのか。「顔の見える関係」「代替不可能性」を彫琢した本研究の成果は、こうした現代社会の新たな問題とも接続し、展開することができると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 福井栄二郎	4. 巻 18
2. 論文標題 逆輸入されたカーゴカルト：ヴァヌアツアネイチュム島の観光と開発	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 13-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 福井 栄二郎
2. 発表標題 他者への「配慮」と分断しない社会：ヴァヌアツの観光をめぐる
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福井 栄二郎
2. 発表標題 楽園とダークネス
3. 学会等名 日本文化人類学会東北地区懇談会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福井 栄二郎
2. 発表標題 逆輸入されたカーゴカルト
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 FUKUI Eijiro
2. 発表標題 Civility and Maintaining Unity in Society
3. 学会等名 SEAMA 2023: Islands Tourism & Hospitality Management (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福井栄二郎
2. 発表標題 死の場面における状況的人格の表出：ヴァヌアツ・アネイチュム島の事例から
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 福井 栄二郎	4. 発行年 2024年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 374
3. 書名 共在する人格：歴史と現在を生きるメラネシア社会	

1. 著者名 福井 栄二郎 ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 192
3. 書名 世界ぐるぐる怪異紀行：どうして「わからないもの」はこわいの？	

1. 著者名 福井 栄二郎 ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 390
3. 書名 世界のクリスマス百科事典	

1. 著者名 浮ヶ谷 幸代、田代 志門、山田 慎也	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 408
3. 書名 現代日本の「看取り文化」を構想する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------